

ビル建設に伴う  
宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書

1999

財団法人 東大阪市文化財協会

図1 調査地の調査前の様子



## 例　言

1. 本書は財団法人東大阪市文化財協会が吉村長信氏の委託を受けて、1993年7月1日～同7月31日に東大阪市長堂1丁目74-3番地で実施した宮ノ下遺跡第3次発掘調査の報告書である。
  2. 調査・整理にかかる費用はすべて吉村長信氏が負担した。
  3. 本事業は財団法人東大阪市文化財協会調査員・別所秀高が担当した。
  4. 写真撮影および本書の執筆・編集は別所が行った。
  5. 調査地の基準点の平面座標には国土平面直角座標第VI系を用い、標高は東京湾中等潮位(T.P.)を基準とした。また、堆積層の色調の記載には農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準色色帖」を、粒径の記載にはWentworth(1922)の粒径区分を用いた。
  6. 調査・整理に参加した補助員は以下のとおりである。
- 荒川晶子　入山彰正　大久保勝行　小汐伸征　谷山紀子　田村真理　田村留津子（五十音順）
7. 動物遺体の一部は故久保和士氏（当時財団法人東大阪市文化財協会調査員）に同定を依頼した。
  8. 現地調査にあたっては吉村長信氏をはじめ、安西工業株式会社の関係者各位の尽力を賜ったほか、財団法人東大阪市文化財協会の職員諸氏に助言を得た。これらの方々に記して感謝いたします。

## 目　次

第1章 はじめに	1
調査の経過	1
既調査成果	1
布施の旧街道	2
東大阪市西部の遺跡	3
第2章 層序と堆積環境	5
第3章 遺構	9
第4章 遺物	11
土器および土製品	11
石器	15
木製品	15
動物遺体	17
第5章 まとめ—宮ノ下遺跡における縄文時代晚期～弥生時代中期初頭の選択的な食料獲得手段	18

## 第1章 はじめに

### 調査の経過

宮ノ下遺跡は大阪府東大阪市長堂および足代新町の近鉄布施駅北側で橋円状に括がっていると考えられている（東大阪市教育委員会1996）。本調査地点は第1次調査地点北西隣接地の長堂1丁目74-3番地で、今回当地地主の吉村長信氏がビル建設を計画し、東大阪市教育委員会が試掘調査を実施したところ、多数の赤陶土器が見つかったため本調査に至った。

### 既調査成果

宮ノ下遺跡は1992年2月に、「ヴェルノール布施」の建設工事に先立って行われた試掘調査で発見された遺跡で、1999年3月時点で財団法人東大阪市文化財協会によって計8回の本調査が実施されている（図3）。ヴェルノール布施建設予定地内に行われた第1次調査では、浅い谷の中に形成された縄文時代晚期～弥生時代の貝塚が（別所1996a）、南側に隣接する「布施駅北口地下駐車場」建設工事に先行して行われた第2次調査では、谷の底きや周辺の水を谷へ排水するための溝などが見つかった（別所1996b）。本調査でも同様の溝と弥生時代中期の遺物を確認した。第3次調査までは、より上位の層準で中世の遺物が散見されていたものの調査の対象にはならなかったが、第4次調査で古代・中世の遺物を含む堆積層がはじめて確認され、以降の調査ではこれらも対象に含まれることになった。また、貝塚が埋没していた深い谷の底きがこの調査でも検出され、この谷は相対的な海水準の低下によって形成されたものであることが指摘された。これらの調査では、河内平野中央部における縄文時代～弥生時代の古環境変遷を明らかにするための様々なデータを得ることができた。



図2 調査地の現況

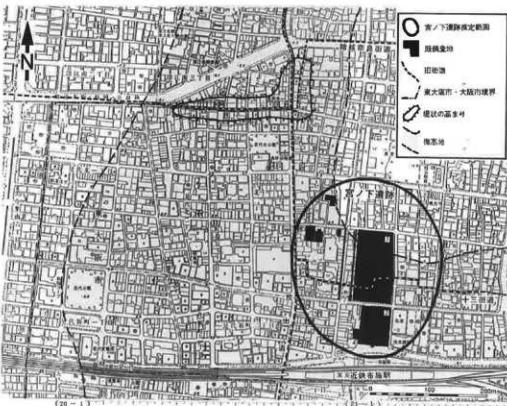


図3 宮ノ下遺跡の推定範囲と周辺の微高地・旧街道、黒ベタは既調査地点、数字は調査次数（1999年3月現在）。

第6次調査では奈良~明治時代の水田跡や畑の耕作地跡、井戸跡、鎌倉~室町時代の建物跡が検出され、堆積物の分布や土地条件図から調査地西方にかつての流路があり、自然堤防の上で集落が形成されていたことが推測されている(松田 1997)。第6次調査地点より西側で行われた第7次調査では予想どおり、集落跡を想起させるような高密度で分布する平安~鎌倉時代のピットのほか、井戸、耕作地跡、井戸跡等が東面隣接地の第8次調査(中西 1998)でも同時期の井戸、耕作地跡、井戸跡が検出されている。また、第10次調査では鎌倉~室町時代の耕作地跡、江戸時代後期~明治時代初頭のかんがい水路跡などが見つかっている。これらのうち平安~鎌倉時代の集落跡や耕作地跡は、妙心寺文書の「後村上天皇宸旨案(正平5年7月11日)」・「北畠親房寄進状(同年12月5日)」・「河内国司序宣(同年12月9日)」・「師守記(延文元年3月10日)」・「後円融天皇宸旨(康暦2年3月20日)」にみられる「足代庄」・「大乘院寺社雜事記(延徳3年9月16日・18日条)」にみられる「網代庄」(平凡社 1986)の一画に比定される。なお、もとは字北町にあったとされ(布施市史編纂委員会 1962)、現在足代1丁目にある足代地蔵尊には「永禄十年戊辰十月廿四日 河内國浜川郡足代庄」の銘があり、莊園制度の崩壊期にもの領主にとって代わった新規支配勢力に抵抗した在地農民の証であることがうかがわれる。

いっぽう、遺跡周辺の空中写真や地形図を詳細に観察すると遺跡推定範囲の西側および南側に微高地が認められ、遺跡推定範囲の大部分を覆っていることがわかる(図2)。これまでの宮ノ下遺跡の調査では、古墳時代後期以降に堆積した流路堆積物や洪流水堆積物が見つかっており、この微高地はかつての大和川の分流の一つである足代分流路(別所 1999)が形成した自然堤防と考えられる。第6次調査以降の調査成果を考慮すると、宮ノ下遺跡の中世の集落跡は足代分流路の自然堤防上に位置していたと推測され、現在の推定範囲より西側の足代北2丁目、足代新町2丁目付近まで広がっていると思われる。

#### 布施の旧街道

宮ノ下遺跡の北側には東西に延びる「暗越奈良街道」、西側には足代分流路に沿って南北に延びる「放出道」、遺跡地を東西に横断し南東方に延びる「十三街道」がある(図3)。これら旧街道がいつごろ整備されたのかよくわかっていない。「布施市史」は平城京から難波宮への行幸のさいには、「暗越奈良街道」が難波宮と平城京をむすぶ最短ルートであると述べ(布施市史編纂委員会 1962)、奈良時代にはすでに整備されていたことを示唆している。また、「放出道」は別名「左専道(させんどう)」とよばれ、首原道真が筑紫(太宰府)へ左遷される道中、道明寺(現藤井寺市)へ立ち寄ったときに往来した道といわれ(角川日本地名大辞典編纂委員会編 1982)。これら諸街道の成立に関しては考古学的な調査成果が待たれるところであるが、「放出道」と「十三街道」は図3に示した大和川の分流が形成した自然堤防に沿ってのびていることから、当地周辺で流路が固定されたのちに整備されたと考えられる。近世の「暗越奈良街道」はお伊勢参りの人々でおおいに賑わったようで、人々は足代や深江付近の街道沿いで背笠を買い、奈良方面へ向かったといわれる(藤井 1983)。この背笠は「河内笠」と呼ばれ、足代方面へ向かっていられる。



図4 深江稻荷神社(大阪市城東区深江南町所在)。旧津津国では「河内笠」ではなく、「折津背笠」と呼ばれていた。この神社の境内には往時を傳ふ「津津笠絆跡」、「深江背笠ゆかりの地」の碑が設けられている。

代、高井田、森河内、深江で多数生産されていた(布施市史編纂委員会 1962)。

宮ノ下遺跡近傍を巡るこれら3つの旧街道は、明治22年の大阪鉄道淡路駅・柏原間(現JR 大和路線)、明治26年の浪速鉄道相生・四条驛間(同学研都市線)、大正3年の大阪電気軌道上六・奈良間(現近鉄奈良線)の相次ぐ鉄道開通により街道としての往時の賑わいがなくなってしまったが、近年近鉄布施駅の周辺は市内最大の商業圏として栄えている。

#### 東大阪市西部の遺跡

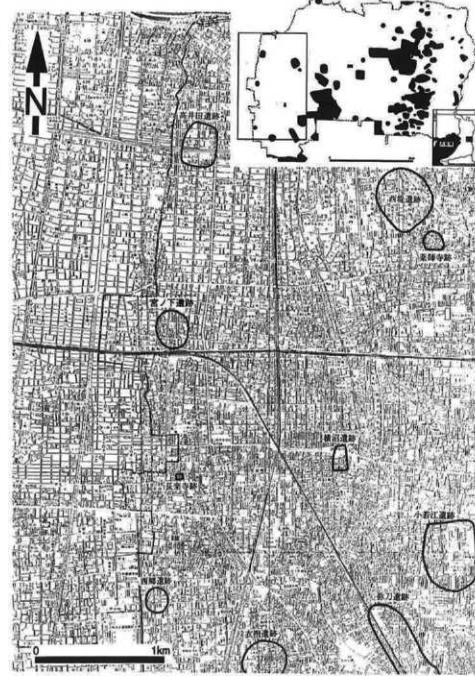
宮ノ下遺跡が位置する東大阪市西部域ではあまり遺跡が確認されておらず、調査例も少ない。これは本地域が河内平野堆積盆地の中央部に位置し、地下深くに遺跡が埋没しており、本来存在する遺跡を見つにくかったためと思われる。しかしながら、1992年の宮ノ下遺跡の発見により、今後も東大阪市西部域で新たに遺跡が見つかる可能性があることが関係者に再認識された。とくに、旧大和川の分流が形成した自然堤防上には、古代以前の遺跡が埋没していることが予想される。東大阪市西部域の遺跡分布図を図5に示す。

・高井田遺跡は宮ノ下遺跡の北方1.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に下水道管埋設工事で発見されて以来、布施市教育委員会、河内考古学研究会、東大阪市文化財協会によって3回の調査がおこなわれ、弥生時代前期~中期初頭の遺物、ピット・溝・杭列、6世紀後半から7世紀初頭の須恵器・土師器などが見つかっている(布施市教育委員会 1963, 原田 1984)。このうち、第1次調査で出土した弥生時代前期~中期初頭の土器に、朝鮮系無文土器が含まれることが指摘されている(田代 1985)。

西堤遺跡は宮ノ下遺跡の東方2kmの自然堤防上に位置する。1968年に下水道管埋設工事で発見された。これまでの調査では、5世紀末から6世紀の須恵器・土師器、ウシ・ウマの骨、平安時代の土師器、公朝十二錢の一つである「赤昌寶」などが出土した(下村 1977)。

小若江遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3kmの自然堤防上に位置する。1940年に日本大学大阪専門学院(現近畿大学)構内で発見され、かつては「長瀬」遺跡と呼ばれていた。

図5 東大阪市西部域の遺跡分布図



れていた。発見当時は調査がおこなわれなかつたものの、工事中に地下3~7mで多数の遺物が採集された。採集された遺物には、弥生時代中期の土器、古墳時代前期の土師器、同後期の須恵器、土師器や壺形埴輪、円筒埴輪がある(布施市史編纂委員会1962)。近年になって近畿大学や東大阪市文化財協会によっても調査が実施されており、奈良・平安時代および中世の遺物や構造が確認されている。

弥刀遺跡は宮ノ下遺跡の南東方3.5kmの自然堤防上に位置する。1963年に市立跡刀小学校の校舎建設工事の際に発見された(辻合ほか1964)。これまで東大阪市教育委員会、東大阪市遺跡保護調査会、東大阪市文化財協会などによって8回の調査がおこなわれ、古墳時代前期の土師器、ピット・土壙・井戸、古墳時代後期の須恵器・土師器、平安時代~鎌倉時代の土師器、黒色土器・瓦器・建物跡・井戸・溝・土壙などが確認されている(下村1980~1992、芋本1989、原田1990)。また、近鉄大阪線沿いにある近鉄跡刀電変電所内では、かつて奈良時代の人面墨書き土器がみつかっており、これは現在名古屋市立博物館が所蔵している。

#### 文献

- 芋本隆裕 1989 弥刀遺跡第5次発掘調査報告、「東大阪市文化財協会概報集-1988年度」、東大阪市文化財協会。
- 角川日本地名大辞典編纂委員会編 1982 「角川日本地名大辞典 27 大阪府」
- 下村晴文 1977 「村上学園校舎増築工事に伴う西堀遺跡調査概報」、東大阪市教育委員会、  
—— 1980 弥刀遺跡発掘調査概報、「東大阪市遺跡保護調査会発掘調査概報集-1980  
年度」、東大阪市遺跡保護調査会。
- 1992 弥刀遺跡第7次発掘調査、「東大阪市埋蔵文化財発掘調査概要-平成3年度  
ー」、東大阪市教育委員会。
- 田代 弘 1985 穂内南辺部における「朝鮮系無文土器」の新例、森浩一編「同志社大学考古学シリーズII 古学古と移動・移住」、225-233。
- 辻合喜代太郎・萩田昭次・浅田松次郎・桑原正明 1964 友井出土の須恵器と木片、「河内文化」11, 38-43。
- 中西克宏 1998 「宮ノ下遺跡第8次発掘調査報告書」、東大阪市文化財協会。
- 原田 修 1984 「高井田遺跡第2・3次調査報告」、東大阪市文化財協会。
- 1990 弥刀遺跡第4次調査報告、「山賀遺跡発掘調査報告書-付録刀・瓜生堂・繩手・若江遺跡調査概要ー」、東大阪市教育委員会。
- 東大阪市教育委員会 1997 「東大阪市内埋蔵文化財蔵置地・指定文化財分布図」
- 別所秀高 1996a 層序及び遺跡形成過程、「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊、東大阪市文化財協会、7-26。
- 1996b 「布施駅北口駐車場整備及び夜景川流域調節池建設工事に伴う宮ノ下遺跡第2次発掘調査報告書」、東大阪市教育委員会・東大阪市文化財協会。
- 1999 「ビル建設工事に伴う宮ノ下遺跡第10次発掘調査報告書-東大阪市尼代地域における足代分流路の形成と歴史時代の人間活動の変遷」、東大阪市文化財協会。
- 藤井直正 1983 「東大阪市の歴史」、松総社。
- 布施市教育委員会 1963 「高井田遺跡調査報告」
- 布施市史編纂委員会編 1962 「布施市史」第1巻。
- 平凡社 1986 「日本歴史地名系第28巻 大阪府の地名II」
- 松田順一郎 1997 「宮ノ下遺跡東部における歴史時代の層序-地下埋設管工事に伴う宮ノ下遺跡第7次発掘調査報告書ー」、東大阪市文化財協会。

## 第2章 層序と堆積環境

本調査ではT.P.2.1~0.8m付近までの堆積層を観察することができた。周辺の既測定成果よりT.P.0.1mより上位(1~28層)は沖積頂部隙成層、それ以下(29,30層)は沖積上部砂層に相当する。このうち弥生時代の遺物が産出するT.P.0.3~0.8mが調査対象で、この層厚間で弥生時代中期初頭(畿内第II様式期)と同中期中葉(畿内第III様式期)の遺構面を検出した。調査地西壁および南壁の堆積層断面図を図7に示し、以下各層について述べる。

1層は人為的な堆積層でレンガ片・ガラス片・空缶など近~現代の遺物が多産する。既存建物の基礎施工や本調査に伴う表層部の整地により形成された。

2層は調査地北側で東西方向に伸びる溝の堆土でSBG1.7/1青黒色の砂質シルトからなる。調査地北側の道路に付随する側溝にあたり、おおむね明治時代頃まで機能していたと考えられる。

3層はSBG5/1青灰色を呈し、細礫~粗粒砂が混じる砂質泥。堆積構造がみられず、人為的に攪拌されていることから煙の作土層と考えられる。

4層は7.5Y5/6明褐色を呈し、細礫~粗粒砂が混じる砂質泥。本層下半は酸化鉄や酸化マンガンが集積している。堆積構造がみられず、人為的に攪拌されていることから煙の作土層と考えられる。

5,6,7,8層は人為的に開削された溝の堆土で、この溝はより低所で營まれた水田に配水するための灌漑水路と考えられる。5層と6層は指交する。5層は10GY5/1緑灰色を呈し、細礫~粗粒砂が混じる砂質泥。拳大~人頭大のブロック状の塊がみられる。6層は2.5Y6/1黄褐色を呈し素層をまれに挟むシルト。7層は10BG5/1緑灰色を呈する砂質泥。溝の壁斜面に沿って分布する。8層はN5/10灰色を呈する砂質泥。溝の底に分布する。以上の各層のうち、7,8層は人為的な要素を否定できないが、壁斜面や溝の外の堆積物が崩落し、壁斜面や底に堆積したもの、6層は溝の冠水時に浮遊物質が堆積したもの、5層は溝の冠水時に人為的に埋め立てられたものと解釈される。

9層は7.5YR5/4にぶい橙色を呈し、細礫~粗粒砂が混じる砂質泥。下位に分布



図6 西壁断面 (T.P.1.5~0.3m付近)、3~18層、北より撮影。

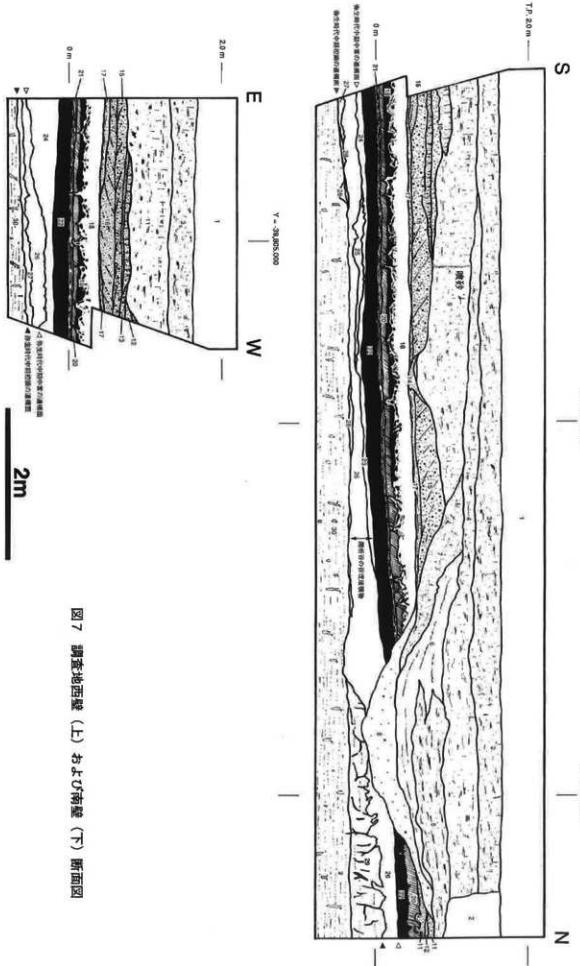


図7 調査地西壁（上）および南壁（下）断面図

する砂層を侵食的に覆っている。堆積構造がみられず、人為的に攪拌されていることから畑の作土層と考えられる。また、地震動によって下層の砂が本層を貫通する噴砂が認められた（図8）。

10層は上下に細分され。上部は堆積構造がみられず、SY6/2灰オリーブ色を呈する細部～中粒砂。下部は堆積構造がみられない砂質泥。いずれも人為的な堆積構造で、上部の給源は下位の16層、下部の給源は9層と考えられる。

以上の3～10層からは考古遺物が産出しなかったが、周辺の既調査地点の同層準からは13世紀～15世紀頃の土器が産出していることや、下位の砂層は奈良～平安時代に形成されたことが判っていることから、これらの層準は広く見積もって12世紀～近世頃の堆積層と考えられる。

11層は水平～プラナー型斜交層理をなし、N40/0灰色を呈する極粗粒砂～中粒砂。後述する15層と一連のものと考えられる。11層中に狹まる12層は10Y6/1灰色を呈する極細粒砂～シルト。調査地北溝の11層と21層の境界には、上下の堆積物の密度の違いによって生じたロードキャストが観察された。

13層は10Y6/1灰色を呈する細粒砂～粗粒砂。14層は5BG5/1青灰色を呈する極細粒砂～粗粒砂。14層から13層にかけて逆級化をなす。13層上部には土壤形成が認められた。

15層はプラナー型斜交層理をなし15Y8/3淡黄色を呈する細粒～細粒砂。層理面の最大傾斜方向から古流向は北東東と考えられる。

16層はプラナー型斜交層理をなし、10YR7/1灰白色を呈する細粒から中粒砂。層理面の最大傾斜方向から古流向は東北東と考えられる。

17層は水平層理をなし、5BG6/1青灰色を呈する極細粒砂から細粒砂。以上の11～17層は調査地西側を流れていた足代分流路からの越流堆積物と推測される。

18層は無層理で2.5Y6/1黄灰色を呈する粘土質シルト。

19層はN2/0黒色を呈する粘土質シルト。有機物を多く含む。

20層は10Y4/1灰色を呈する粘土質シルト。有機物を含む。

21層は2.5GY7/1明オリーブ色を呈する粘土質シルト。

22層はを呈するシルト。有機物を多く含み、とくに下半分には未分解の植物遺

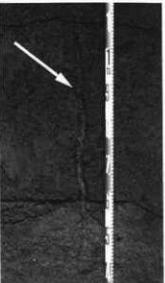


図8 西壁断面9層中にみられた噴砂。15層の砂が噴き上がっている。

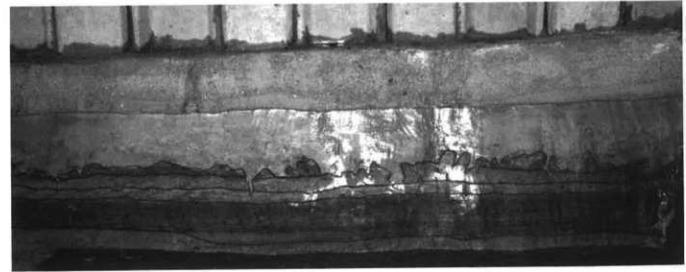


図9 南壁断面（0.5～0.2m付近）、15～24層。

図10 西壁断面 (0.5 ~ -0.4m付近). 16 ~ 30層。

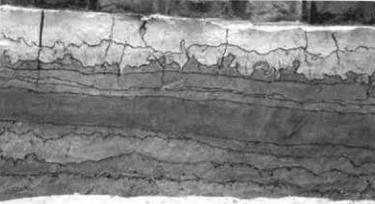
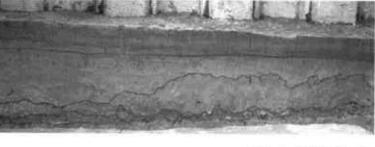


図11 西壁断面北端 (0.3 ~ -0.3m付近). 22 ~ 26層。



図12 南壁断面 (0.2 ~ -0.6m付近). 22 ~ 30層。



ところで調査地西側の堆積層断面からは、26層および27,28層が下位の29,30層を侵食的に覆っていることがわかる。これは本調査地点の東側の第1次調査でみつかった開拓谷（いわゆる「埋積溝谷」）と同様、北西隅で合流する支谷で東北東～西南西方向に延びていると考えられる。したがって26～28層は谷縫の堆積物といえ、その上を覆う19～22層はこの谷地形に従って南へ傾斜している。

29層は5GY6/1オリーブ灰色を呈し、まれに極細粒砂～細粒砂の薄層を挟むシルト。植物の地下茎がよくみられる。

30層は7GY6/1緑灰色を呈する極細粒砂～細粒砂とシルト質粘土の互層。カニ・貝類の生痕化石が顕著にみられる。

30層の互層のうち粗粒部は波によって運ばれた掃流土砂、細粒部は水中の浮遊物質が減水時に掃流土砂の土を覆うように沈積したものと考えられ、かつ30層中には生痕化石が顕著にみられるところから、同層は干潟の堆積環境が推測される。また29層は干潟後背の湿地で、暴雨時や大潮時の増水期にヨシなどの抽水植物の茎に浮遊物質がトラップされてその場に堆積したものと考えられる。

体がみられる。

- 23層は7.5Y5/2灰オリーブ色を呈する粘土質シルト。
- 24層は5Y5/2灰オリーブ色を呈する極細粒砂質シルト。
- 25層は2.5Y5/1オリーブ灰色を呈す極細粒砂質シルト。
- 26層は2.5Y4/2暗灰黄色を呈す砂質シルト。
- 27層は5YS/1灰色を呈し、極細粒砂～中粒砂が混じる砂質シルト。
- 28層は5YS/1灰色を呈し、極細粒砂質シルト。

以上のうち18～22層からは遺物がまったく出土しなかったが、周辺の既調査地点との層序対比から、18層は古墳時代後期頃（5世紀末）～飛鳥時代（6世紀）、19層～22層は弥生時代中期末～古墳時代中期（5世紀前半）に比定することができる。23～24層からは弥生時代中期中葉の土器が、26層からは弥生時代中期初頭の土器が出土した。

18～28層はいずれも後背湿地の堆積環境を示し、19,20層と22層は抽水植物が近隣もしくは現地に繁茂する好気的で静穏な水域の環境を、他の層準は嫌気的で静穏な水域の環境を推測することができる。また、18～20層にかけての堆積層中には地震動による変形構造が認められた。18層上半には断層的な変形構造がみられないことから、5世紀末～6世紀頃に起こった地震に対比できる。

### 第3章 遺構

本調査では23～25層を除去した段階で弥生時代中期頃の遺構面を、26層を除去した段階で中期初頭の遺構面を検出した。

弥生時代中期中葉の遺構面からは浅い橈円形状の土壙（EP1）を検出した（図14,15）。EP1（図16）は長軸94cm、短軸49cm、深さ最大22cmを測る。検出時の遺構の輪郭はかなり不明瞭であった。出土遺物はまったくなかった。EP1直上には墳頂より上を欠損した畿内第III式樣期の壺が検出されており（図13）、この壺の重みで下位の地層が変形し、凹み状の微地形ができたと考えられ、EP1を遺構として誤認した可能性がある。



図13 EP-1の直上で検出した壺

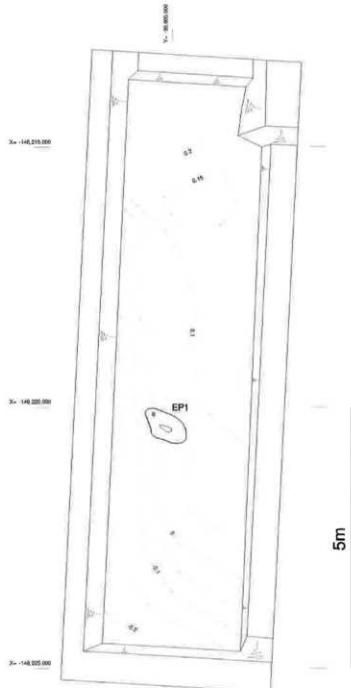


図14 弥生時代中期中葉の遺構面測量図



図15 弥生時代中期中葉の遺構面、北より撮影。



図16 EP1 完掘状況。

図18 弥生時代中期初頭の遺構面、北より撮影。



図19  
DC1の上部埋土から出土した遺物。

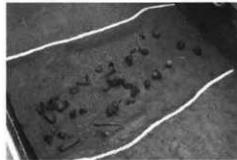


図20  
DC1の埋土中にみられた貝化石。

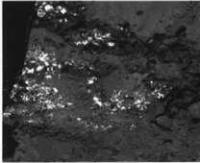


図21  
開析谷の谷堆積物(26層)から出土した遺物。



弥生時代中期初頭の遺構面からは溝（DC1）とピット（PT1,PT2）を検出した（図17,18）。DC1は幅最大2m、深さ最大45cmの溝で、弥生時代畿内第II様式期の土器、石器、木器（図19）、貝化石（図20）、動物遺体などが出土した。この溝は調査地西側で急激に深さを減じることから長細い土壤の可能性がある。PT1,2はいずれも直径約12cmの円形で、杭の痕跡と考えられる。出土遺物はまったくなかった。また、この遺構面は北と南で約50cmの高低差があり、開析谷の緩やかな谷壁斜面をなす。この谷壁の堆積物のうち、とくに26層からは同時期の遺物が出土した（図21）。

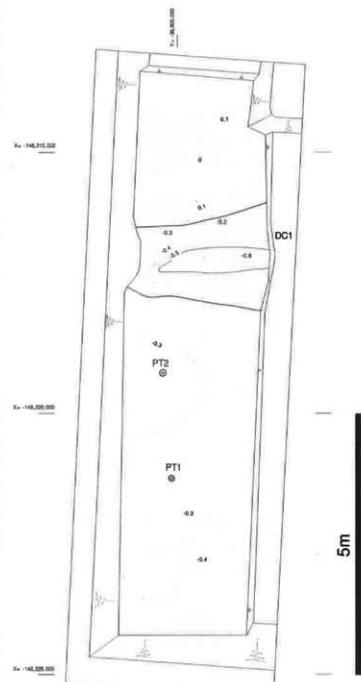


図17 弥生時代中期初頭の遺構面測量図。

#### 第4章 遺物

##### 土器および土製品

23層、26層およびDC1より弥生土器および土製品が出土した。各層出土土器の型式より23層は弥生時代中期中葉、26層およびDC1は同中期初頭に属するものと考えられる。

##### ・23層

口縁部と底部が欠損した壺1点のみが比較的まとまった状態で出土した（図13,22）。胴部は球形状でその上半にはタテ方向の粗いハケメが施されている。頸部には押捺突帯がみられる。浜津系の壺と考えられ、畿内第III様式期に併行する。

##### ・26層

破片が多く、全体を復原できるものはない。壺（図23,24）、鉢（図24,25）、甕（図26,27）がみられる。

壺はすべて広口壺と考えられ、口縁部の特徴から口縁端部を丸く収めたもの（7）、外反しつつ頸部から口縁端部にかけて徐々に器盤の厚さを増し口縁端面をもつもの（3,6,8,9,12）、口縁端部が垂下するもの（4,5）に分類される。4,6の端面は無文、3,9は櫛描波状文が、8,12は櫛描直線文が施され、さらに8の端面上端にはヘラ状工具による刻目、12の端面下端には押捺による刻目がみられる。これらのうち6,9の頸部には櫛描直線文が施されている。11は口縁部を欠損し、頸部にはヨコ方向の櫛描直線文とタテ方向の櫛描の直線文が施されている。

鉢には稚拙な櫛描波状文をもつもの（10）、粗いハケメが施され把手が付けられたもの（13,14）、ヨコ方向の粗いミガキが施されたもの（15）がある。

甕には口縁端部に明瞭な稜をもつもの（19,20,24,25）と明瞭な稜がみられないもの（16,17,18,21,22,23）がある。いずれも胴部にはハケメが施され、口縁は短く外反する。1はヘラケズリが施された胴部下半と上半の境界に稜をもち、口縁はゆるやかに外反しながら立ち上がる。また、胎土にはやや丸みを帯びた結晶片岩の粗い砂粒が含まれることから、紀伊地方から持ち込まれたものと考えられる。

26,30～36は壺、鉢あるいは甕の底部で、35,36には焼成後の穿孔があざ（図28）。

以上の土器は畿内第II様式期に併行する。

図22 23層出土壺。



図23 26層出土壺。

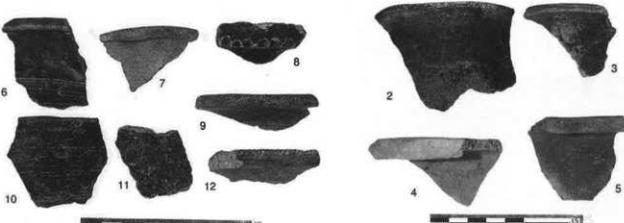


図24 26層出土壺・鉢。

図25 26層出土鉢。

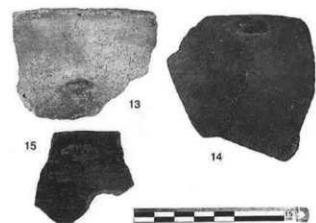


図26 26層出土壺。

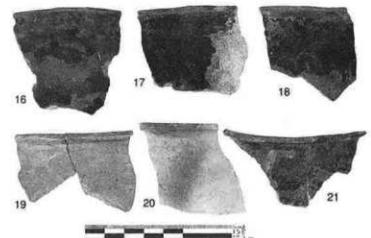


図27 26層出土壺。



図28 26層およびDC1出土壺・鉢・壺底部。

• DC1

本遺構出土土器も破片が多く、全体を復原できるものは少ない。壺(図29~33)、鉢(図34,35)、壺(図36~38)、打ち欠き(図34)がみられる。

壺は太頸広口壺(37)、長頸広口壺(38,39,40)、広口壺(41,42,43,44)に分類される。37は畿内第1様式の太頸広口壺の系譜をもつもので、肩～頸部にかけて櫛描直線文が施されている。胎土中の砂粒には円磨されたチャートがよく目立つ。38は頸部に櫛描直線文が施されている。39および40は頸部が欠損しているものの、長頸広口壺の胴部と考られ櫛描直線文が施されている。41は外反しつつ頸部から口縁端部にかけて徐々に器壁の厚さを増し口縁端面をもつ。口縁端面には櫛描直線文が、胴部には櫛描直線文がみられる。42の胴部には櫛描直線文と櫛描波状文が施されている。43と44は同一個体と考えられる。胴部と頸部に櫛描直線文が施されている。

鉢には内湾口縁のもの(45,46,48)、外反口縁のもの(47)がある。48は無文、45,46,47は流水文が施されている。これらの流水文は上下の櫛描直線文に、同じ櫛原体で弧を描いて結んだものである。

図29  
DC1出土壺。



図30  
DC1出土壺。



図31 DC1出土壺。

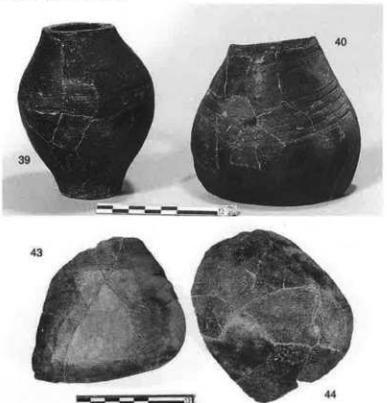


図32 DC1出土壺。

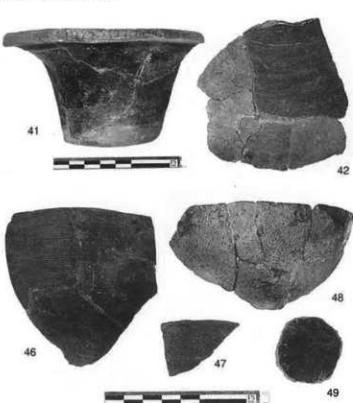


図33 DC1出土壺。

図35 DC1出土鉢。

図36 DC1出土壺。

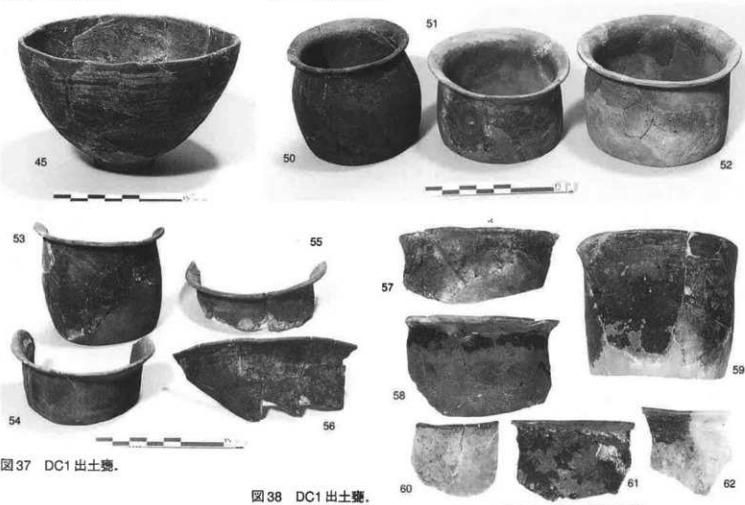


図37 DC1出土壺。

図38 DC1出土壺。



図39 DC1 出土壺・甕底部。



図41 DC1 出土壺・鉢・甕底部。



図40 DC1 出土壺・甕底部。

堀のうち50は頸部で強く屈曲しながら外反する。それ以外のものは口縁がゆるやかに外反しながら立ち上がる。器表面の調整法からハケメを施されたもの(50,56,59,62)、ミガキを施されたもの(51,52,54,55)、ナデを施されたもの(57,58,61)に分類される。53の胸部上反はナナメハケが施されたのチナテ消されている。下半はタテミガキが施されている。また、50,52,53,55,61は口縁端部に明顯な稜をもつ。

49は土器の打ち欠きで、紡錘車の未製品と考えられる。

28,29,63～73は壺・鉢あるいは甕の底部(図28,39～41)。

以上の土器も鏡内第II様式期に併行し、26層出土土器との時期差はない。

#### 石器

##### ・打製石器

すべて弥生時代中期初頭に併行し、石材は二上山産サスカイトである(図42)。以下の石器タイプおよびサブタイプは松田(1996)に従った。

DC1からは石核A(1)および石核B(2,3)が出土した。いずれも凹面をなす剥離面で構成され、ぶ厚い板状をなす。

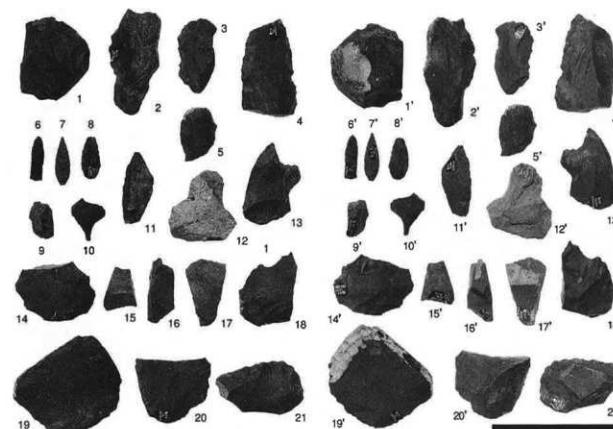
26層からは尖頭器、削器、石錐、剥片、石核が出土した。

尖頭器は器面両面全体を侵襲細部調整で整形したもので、打製石錐(6,7,8)がみられる。

削器は横形剥片の縦縁に平行～厚形で浅形を主とする細部調整が施されたもの。素材剥片の1縁辺に刃部調整が器面全体に施され、刃部の平面形状が凸円形をなす刃部片面調整直刃削器(11,19,20,21)、刃部調整が器片面に施され、刃部の平面形状が直線形をなす刃部片面調整直刃削器(12)、凹形をなす刃部片面調整凹刃削器(15)がある。また、素材剥片の長軸に平行する2つの縁辺に細部調整を施し、刃部調整が器片面面において刃部片面調整複刃削器(4)も含まれる。

石錐(10)は素材剥片の一端を厚形で侵襲細部調整で整形し、もう一方をわず

図42 DC1 および26層出土二上山産サスカイト製打製石器。スケールバーは5cm。



かな調整剝離によって突起を作り出す。

剥片には細部調整がみとめられないもの(13,14,18)と、この他にきわめて小さなものが多数みられた。

石核には凹面をなす剥離面で構成され、ぶ厚い板状をなす石核B(5,9,16,17)がみられた。

##### ・磨製石器

本調査で出土した磨製石器はすべて石包丁である(図43)。

1は刃幅6.95cm、背刃間4.03cm、厚さ0.56cm。石材は結晶片岩。半分以上を欠損する。刃部の破損は著しい。26層出土。

2は刃幅6.15cm、背刃間4.91cm、厚さ0.53cm。石材は緑色片岩。器体表面には製作時の研磨痕が残っている。23層出土。

3は刃幅9.96cm、背刃間3.78cm、厚さ0.83cm。石材は緑色片岩。半分以上を欠損する。刃部の破損や磨耗が著しい。23層出土。

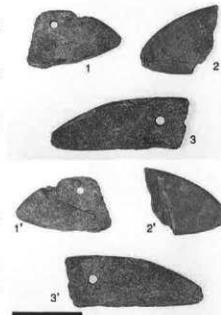
以上の石材は中央構造線に沿って分布する三波川帯で産出するもので、紀ノ川下流の河床やその左岸で採取されたものと考えられる。

#### 木製品

すべて24層から出土し(図44,45)、弥生時代中期中葉に併行する。以下で用いた分類名は奈良国立文化財研究所(1993)に従った。

1は段を有し、先端にかけてすぼまる形態をもつ斧台で、袋状鉄斧の柄と考えられる。斧台の一部は欠損している。斧台部の最大幅は5.5cm、装着部の長さは2.8cm、最大幅3.2cm。

図43 23層および26層出土石包丁。スケールバーは5cm。



2は角柱状の棒材の一端を大きく削り出して釘状に仕上げ、身部に柄孔を穿つ。建築部材の一部で、栓と考えられる。長さ14cm、釘頭部の最大幅5.5cm、身部の最大幅4.1cm、厚さ2.9cmを測る。

3は斧台前部装着面の横断面形がゆるやかな凹状をなすことから、大型蛤刃石斧もしくはやや厚みのある凸レンズ状の断面形をもつ扁平片刃石斧の柄と考えられる。斧台には紐かけのための段をもつ。装着角度は約20°。斧台全長は約12cm。

4は直径約8.5cmの棒材の一端を丁寧に削り出し、突起部をもつ。用途は不明。全長15.2cm。

図44 24層出土木製品。

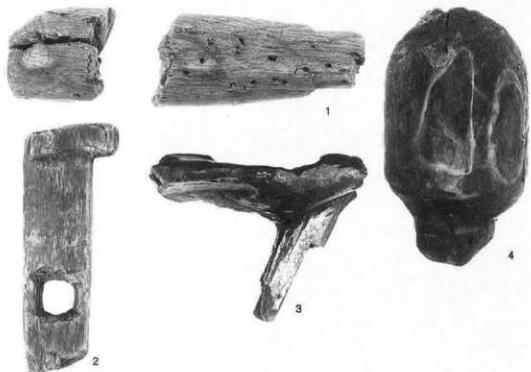
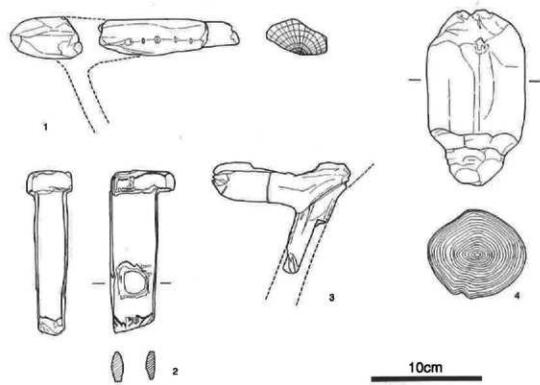


図45 木製品実測図。



#### 動物遺体

本調査で産出した動物遺体の時期別種名は以下の通り。

発生時代中期中葉

Mammalia 哺乳動物綱

*Sus scrofa* イノシシ

発生時代中期初頭

Bivalvia 二枚貝綱

*Cordicula sandai* セタシジミ

*Saxidomus purpuratus* ウチムラサキガイ

*Meretrix lusoria* ハマグリ

Aves 鳥綱

Mammalia 哺乳動物綱

*Sus scrofa* イノシシ

貝類はすべてDC1より産出した(図46)。セタシジミが約99%を占め、ウチムラサキガイやハマグリなど他の貝類は僅かに含まれる程度である。セタシジミは琵琶湖水系にしか生息しない固有種で、汽水域では交配できないとされる。

26層からは鳥類の叉骨が産出した(図47-6)。同定はできなかった。解体痕は認められない。

イノシシの骨は24層、26層、DC1でみられた。24層からは殴打により一部を欠いた後頭葉(図47-7)、26層からは切歯(図47-4)が産出した。DC1からは第1および第2大臼歯を伴った左上顎骨の一部(図47-1)、第1大臼歯2点(図47-2,3)、左大脛骨の遠位(図47-5)が産出した。大脛骨骨体から遠位端にかけては1条の擦痕が認められる。大臼歯咬合面の磨耗が少ないとや大脳骨骨体と遠位端の蓄着が進んでいないことから、DC1で産出したイノシシはすべて若獣と考えられる。



図46 DC1産出貝化石。

左:セタシジミ、右上:ウチムラサキガイ、右下:ハマグリ。



図47 24層、26層およびDC1産出動物遺体。

#### 文献

奈良国立文化財研究所編 1993 奈良国立文化財研究所史料第36番「木器集成図録近畿原始篇」

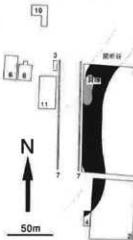
松田順一郎 1996 IV-1. 打製石器、「宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書」第2分冊、東大阪市教育委員会・財团法人東大阪市文化財協会、57-121。

表1 宮ノ下遺跡の遺構・遺物の出現  
頻度および特徴の時期的変化。

(Xない、△ほとんどない、△△少し、○ある、○△多い、●非常に多い)

	縄文時代 -弥生I期	弥生II期	弥生III期
遺構の種類	遺物群 遺物群 遺物群	遺物群 遺物群 遺物群	遺物群 遺物群 遺物群
遺構出現頻度	△	○	●
貝塚の形態	遺構大 →一ヶ所集中	遺構大 →一ヶ所集中	遺構小 分散
土器の形態	△	▲	○
木製の道具	△	△	●
石器の形態	×	×	△
骨器の形態	△	○	●
漆器の形態	△	△	○
金物の形態	△	△	○
香料器の形態	△	△	○

1. 縄文時代晚期  
-弥生時代前期



2. 弥生時代中期  
初期古墳



3. 弥生時代中期  
古墳新規



図48 宮ノ下遺跡における縄文時代から弥生II古相段階までは漁撈・採集を中心とする生業を當み、弥生II新相段階になると水稻耕作と漁撈・採集を併用する生業を選択したことがわかる。しかしながら、縄文時代晚期～弥生II古相段階にも貝塚から石包丁が出土していることや、同じ河内平野に位置する山賀遺跡や池島・福刀寺遺跡では弥生時代前期の水田跡がみつかっていることから、当時の宮ノ下の集団も水稻耕作を知り得たはずである。にもかかわらず、弥生II古相段階まで漁撈・採集を中心とする生業を當み続いたのは、周辺の水分条件や微地形が水稻耕作に適さず、水稻耕作を行うための土地の改変には莫大な労働力が必要であり、その労働力の投資に見合うだけの食料獲得が見込めなかつためだろう。また、弥生II新相段階に水稻耕作を取り入れたのは、周辺の地下水位が低下したことによって水稻耕作に適した土地が確保できること、近隣で水源を確保できるようになったことが考案される。つまり、当時の宮ノ下の集団は周辺の水分条件や微地形に支配されつつも漁撈・採集、水稻農耕、漁撈・採集と水稻農耕の併用のうち、どの生業形態に依存するかという選択肢をすでに持っていたことから弥生時代中期初頭にかけての遺構の変化過程。1.の数字は調査次数を示す。

## 第5章 まとめ—宮ノ下遺跡における縄文時代晚期～弥生時代中期初頭の選択的な食料獲得手段

これまでの宮ノ下遺跡の調査成果も併せて本遺跡における縄文時代晚期～弥生時代中期初頭の生業活動を概観し、本調査のまとめとする。

まず既調査地で検出した縄文時代晚期～弥生時代中期初頭の遺構・遺物を分類し、大雑把であるが各時期ごとのそれらの出現頻度と特徴をまとめ(表1)、各時期ごとの遺構の変化過程を図48に示した。これらによると、弥生時代中期初頭(以下「弥生II」と略)の新相段階で遺構の出現頻度が急激に高くなる。これと調和的な傾向を示すのが、土地の維持管理用木製品・樹木伐採用斧柄および石斧、穂積具である。木製の漁撈具や骨製の刺突具は弥生II新相段階で出現する。縄文時代晚期の貝塚には魚類のみ含まれているにもかかわらず、「漁撈具」に分類した道具があまり見あらないことから、これらの道具を必ずしも漁労に使用したとは考えにくい。

いっぽう、貝塚は縄文時代晚期初頭(ca.2800y.B.P.)ごろの海水準低下によって形成された開拓谷(埋積溝谷)に埋没していた(第1次調査地点)。一ヵ所に集中し比較的大規模な貝塚は縄文時代晩期末(船橋式期)につくられ始め、弥生II古相段階まで継続した。弥生II古相段階にはこの貝塚の西側に小屋が建てられ(第11次調査地点)、この小屋は獲得された水産資源の一次加工場として機能していたと推測される。

弥生II新相段階になると開拓谷は埋積がすんだことと周辺の地下水位が低下したことによって、轍が狭く、水深の浅い流路になり、この時に流路に接続する人工溝が多數開削される。流路や人工溝には規模が小さい貝塚が点在し、その周囲には多数のビットや杭列、土壌がみられる。また、流路の東側のやや高いところには畦を伴う杭列があり、この場で水稻耕作が営まれていた。このことから、流路は排水路として使用され、より東側の高所にはこの場へ水を引き込むための灌漑設備が設けられていたことが推測される。当然のことながら、このような土地の人工改変と同調し、この時期には土地の維持管理用木製品・樹木伐採用斧柄および石斧、穂積具の出現頻度が高くなっている。

以上からは、宮ノ下の集団は縄文時代晚期から弥生II古相段階までは漁撈・採集を中心とする生業を當み、弥生II新相段階になると水稻耕作と漁撈・採集を併用する生業を選択したことがわかる。しかしながら、縄文時代晚期～弥生II古相段階にも貝塚から石包丁が出土していることや、同じ河内平野に位置する山賀遺跡や池島・福刀寺遺跡では弥生時代前期の水田跡がみつかっていることから、当時の宮ノ下の集団も水稻耕作を知り得たはずである。にもかかわらず、弥生II古相段階まで漁撈・採集を中心とする生業を當み続いたのは、周辺の水分条件や微地形が水稻耕作に適さず、水稻耕作を行うための土地の改変には莫大な労働力が必要であり、その労働力の投資に見合うだけの食料獲得が見込めなかつためだろう。また、弥生II新相段階に水稻耕作を取り入れたのは、周辺の地下水位が低下したことによって水稻耕作に適した土地が確保できること、近隣で水源を確保できるようになったことが考案される。つまり、当時の宮ノ下の集団は周辺の水分条件や微地形に支配されつつも漁撈・採集、水稻農耕、漁撈・採集と水稻農耕の併用のうち、どの生業形態に依存するかという選択肢をすでに持っていたことから弥生時代中期初頭にかけての遺構の変化過程。1.の数字は調査次数を示す。

## 報告書抄録

ふりがな	びるけんせつにともなうみやのしたいせきだい3	じはくつちょうさばこくしょ
書名	ビル建設に伴う宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書	
副書名		
卷次		
シリーズ名		
シリーズ番号		
編著者名	別所秀高	
編集機関	財團法人東大阪市文化財協会	
発行機関	財團法人東大阪市文化財協会	
発行年月日	1999.03.31	
作成人ID	42170	
郵便番号	577-0843	電話番号 06-6736-0346
住所	東大阪市荒川3丁目28-21	
ふりがな	みやのしたいせき	
遺跡名	宮ノ下遺跡	
ふりがな	ひがしおさかしちょうどう	
遺跡所在地	東大阪市長堂1丁目74-3番地	
市町村コード	27227	遺跡番号 125
北緯	34.3946.	東經 135.33.56.
調査期間	1993.07.01-1993.07.31	調査面積 51.4m <sup>2</sup>
調査原因	ビル建設工事	
種別	排水溝/貝塚	
主な時代	弥生	
遺跡概要	弥生中期初頭・溝+土壌+ビット・弥生土器+打製石器+磨製石器+木製品	
特記事項	出土した弥生土器(畿内第II様式)のなかには、紀伊系の甕、津津系の壺がみられる。	

## 宮ノ下遺跡第3次発掘調査報告書

発行年月日	1999年3月31日
発行	財團法人東大阪市文化財協会
	〒577-0843 東大阪市荒川3丁目28-21
印刷	明文堂工業株式会社
	〒577-0016 東大阪市長田西4丁目38
紙質	表紙・本文 ニューエイジ 157kg/m <sup>2</sup>

The 3rd excavation report of  
Miyanoshita Site, Higashi-osaka City, Japan.

March 1999

Association for Higashi-osaka City Culutural Heritage